

ハイデガーによる自然の概念

小林信之（早稲田大学）

ソフォクレスの「アンティゴネー」の合唱歌において歌われているのは、元初における存在（ピュシス）の圧倒的な力と、「もっとも無気味なもの」である人間の暴力性とのせめぎあいであるとハイデガーは解釈している（『形而上学入門』）。ここで語られている自然とは、たえず生成変化しつつ、しかし恒常的に現前するもの、現れつつ、みずからを隠すもの、また不意に輝きをはなちつつ、わたしたちをとりこにするものである。樹々や鳥たち、朝の光や空気だけでなく、わたしたちの身体そのものが自然であり、したがって自然の一部であるわたしたち人間が、自然のメカニズムを暴き、制御することをくわだてたとしても（たとえばエコロジーにおけるように）、またじっさいそうする以外の選択肢はないとしても、自然はわたしたちには閉ざされた限界の向こう側にひき退いてしまい、どこまでも隠されたままにとどまる。

このような基本的洞察をたえず顧慮しつつ、ハイデガーの「自然」概念がどのように主題化されているかを考えるためには、おおよそつぎのようなフェーズに分節化することが適当であろう。

(1) ピュシスのもっとも基礎的な概念は、とりわけ1930年代のハイデガーの思想において重要な意味をもった。ソクラテス以前の思想家や悲劇詩人の解釈においてピュシスは、アレータイアやロゴス等の基礎的な概念と相依相属しつつ、古代ギリシア人にとっての存在理解の中核をなしていたとみなされる。(2) 古代ギリシアの形而上学（ピュシスを超えた学）におけるピュシス概念。プラトン、アリストテレスに集大成された形而上学のうちにハイデガーは、すでに変容した元初的ピュシスの「残響」を聴きとっている。(3) 古代のピュシス概念は、ラテン語の翻訳（*natura*）を介して西欧近代に受けつがれ、さらにはわたしたちがごく日常的に理解している自然の概念にいたった。この意味での自然は、『存在と時間』でも論じられているように、環境世界で出会われる存在者の存在の派生的様態として、眼前にみいだされる「自然」である。

本論では、主として(1)に焦点をあわせ、そもそもハイデガーが、存在としての元初的ピュシスをどのように解釈したのかを問いたい。そこには、『存在と時間』では未完のまま放置され、語られなかった存在概念が、ポジティブなかたちで指示されていると考えられるが、しかしそれはもちろん素朴な自然回帰ではない。ハイデガーにとってピュシスは、「大地」の概念へと展開していくものであり、人間存在の有限性、存在の真理における隠蔽性、さらには元初的ピュシスの暴力性を含意している。

さらにハイデガーは、広い意味での詩作（ポイエーシス）のうちで、そのような自然が言葉にもたらされると考える。とくにヘルダーリンの詩作は近現代の人間の運命と存在（元初的自然）との連関の可能性を問うものであり、ハイデガーは、自身の思考に呼応する問いをそこにみいだしている。具体的には、ヘルダーリンの詩「あたかも祝祭の日のように……」の解釈等を取りあげて考えたい。